

福岡市景観エッセー

essay

第10回



元 気 を 出 そ う 油 山

倉掛聖子 福岡市南区

毎朝二階の雨戸を開けると、はるか遠くに油山がこんもりと見える。私達家族が「サイコロの展望台」と呼び習わしている白い形が樹々の間に建っている。ちょうど同じくらいの辺の長さの立方体と、真中の丸い窓がサイコロの「1」に見えるのでそう名付けた。

五月の今ごろはあらゆる若葉が茂り山が最も活気づく季節である。冬木立が凍えている頃が過ぎ春が来てあたりの空気が暖かくなると、山もやっと目覚めて薄化粧を始めそして今、力強く輝いている。今年はそれに新しく完通した高速五号線のおまけもついている。

この雨戸の開閉はいつも父の仕事だった。大手の建設会社を定年退職した父は自ら設計した理想の家を建て、意欲に燃えて第二の人生を踏み出した。朝晩この油山を眺めるたびに来し方行く末をしみじみ思ったことだろう。ご近所さんもそんな境遇の人が多く集まっていたようだ。新築した家にまだ現役時代のなごりを残しながら生活していた元会社社員達も、十年二十年と経

つうちにどこから見てもおじいちゃんの顔になり、家は建て替えるの時期を迎えた。そんな校区を人は「年金通り」と呼んでいたが今は「杖通り」と呼ぶそうである。そのうち「車椅子通り」になるかもしれない。

人は年を重ねても、油山は二十年前、三十年前と同じ顔をしている。健康にも恵まれ俳句を友として悠々自適の生き方をしていた父も今年一月に遂に永遠の旅立ちをした。いつも部屋にいるのが当たり前だった父の姿がないのはさすがに寂しい。介護している私もいつの間にか老人と呼ばれる年令になっている。

元気を出そう！ 油山

父が見た同じ風景を私も朝夕眺めながら、父が教えてくれた老いることの意味を今考えている。



熟成を重ねた葡萄酒のような文章に、筆者の自然や人生への豊かな眼差しを感じる。毎朝、雨戸を開ける度に見える油山をキャンバスに、父の思い出や過去・未来の様々な想いを描く。「元気を出そう！」の声を絵筆にして。
(選考委員 中村敏子)

都市景観賞と同時に募集した「福岡市景観エッセー」。今年は「福岡の景観」テーマに募集。97作品の力作の中から、4作品が選考されました。



ツバメが来る風景

佐野さおり 福岡市中央区

私は西公園のフモトに住んでいる。ここは港銀座通りという古くからある商店街のはずれ、そこには私のお気に入りの小さな洋装リフォーム店がある。そして、私と同じようにこの店をお気に入りとしている仲間がいる。

―それは、ツバメである。

リフォーム店の軒下に、毎年ツバメがやってくる。春から秋にかけて卵を産み、子供を育て上げていく姿は、微笑ましくもたくましい。北海道で生まれ育った私は福岡に住んで初めてツバメを見て、その大胆不敵な子育てに驚いた。街中で、しかも、手が届くほど近い距離に巣をつくり子育てする野生動物。北海道では見たことがない。私は毎年、この古巣にツバメが戻ってくるのを楽しみにしていた。ところが昨年初、突然そのリフォーム店が店をたたんでしまった。隣の靴屋のご主人の話では、店主がご主人の介護のために時間を取られ、店を切り盛りできなくなったようだ。長年頼りにしていたおばちゃん。これからは別のお店を探さなくては。ふと、

ツバメの巣が気になった。この建物はどうなるのだろう。新しいテナントが入るのか、それとも取り壊されてしまうのか。何年も使い続けられていた古巣は、ひとの出入りが途絶えたせいか、半分ほど崩れてしまった。来年、ツバメが戻って来るところが残っているだろうか、それだけが心配だった。

そしてこの春、いつも通りにツバメが商店街を悠々と飛んでいる。おばちゃんのリフォーム店は閉店後、家主の物置として使われている。どうやら取り壊す予定はないようだ。ツバメの古巣はいつも通りに泥でリフォームされ、もうそろそろ子供が生まれる頃だ。

家主の靴屋のご主人は、落ちてくる糞を毎日掃除している。

そして私は、軒下の古巣を毎日覗いている。

タイムスリップしたような商店街のひとこま。秋から春にかけての人情劇場が、ツバメとその巣をめぐって展開する。昔はどこにでも見られた風景なのだが、今となっては懐かしい。観察するときめきが伝わってくるようだ。

（選考委員 落合太郎）



窓から見える景色

石橋亜弓 福岡市西区

私は、2年半程前まで住んでいた部屋の窓から見える景色が一番好きです。

高宮駅から徒歩で15分位の小高い所にある集合住宅は12棟あります。5階建ての5階に生後4ヶ月から約10年間住んでいました。

春は裏の公園の桜が枝を張り、一面ピンク色でした。桜が散るとあたりの木々の新緑のグラデー

ドーン、ドーンの音につられて窓から身を乗り出すと、遠くは東の方か、または春日の花火が見えました。花火と音がずれているのが不思議でした。秋になると南京はぜがまつ赤に色づき、実がはじけて白い種が残ります。冬になると南京はぜは葉を落とし、白い種だけが木に残り少し淋しげです。白い種もそのうち鳥たちの貴重な

シヨンが光にあたって、とても鮮やかでした。

梅雨はちょびりつまらなかつたけど、梅雨明けの頃は虹がよくみえました。二重の虹をみたこともあります。夏は、

食べ物になり、寒そうな木の枝だけが残ります。

一、二度雪がどっさり降って、一面まっ白になりました。車の屋根も木もまっ白です。思わず家からとびだして雪だるまを作ったことを覚えています。

窓から見える四季折々の景色は一枚の風景画のようでした。それは私の大切な思い出です。

桜はまだしも、南京はぜという木の名前を当時小学生の彼女はどのように知ったのでしょうか、そしてその季節ごとの変化も？ 回りの小さな風景に関心を寄せる彼女の心の重箱には、色や形や音のご馳走がぎっしり詰まっているからでしょう。

（選考委員 岡本 均）



福岡の景観 ―遊び場の記憶―

大坪空也 福岡市早良区

「もみじいい、気持ち良いねえ。」

今日はとある日曜日、手作り弁当を持って近所の公園で妻と生後5ヶ月の娘と花見である。暖かく風が心地よい小春日和、さぞ我が娘もご機嫌だろうとベビーカーを覗くと……寝ているのである（泣）。まだ春の訪れの喜びも知らない幼子である。

私たちが暮らすのは早良区原団地 昭和40年代の今では古い典型的な団地である。しかしながら当時の設計者は真摯に居住者の生活を空想して設計を進めていたのだらうと察する事が出来る。住居棟の間隔は大きく取られており、日当たり風通しともに十分である。植栽も多い。原団地の桜並木の見事なこと、隠れた名所であり知る人も多い。団地内の散歩小道も意識的に歩車分離がなされており、木陰も多く幼子連れの散歩にはうってつけである。効率性と安全性ばかりが誇張される現代住宅とは違い優しい空気が存在する。

子供に誇れるものはタワーなどのシンボリックな建造物のことではない。それは他の地域への虚勢でしかないのではないか。政治も経済も分からぬ子供にとって大事なのは記憶に残りうる近所の遊び場である。自然と戯れる事で自分も自然の一部であることを感じ取っていくのである。人間は自然に育まれ自然に帰っていくもの、自然は支配・コントロールするものではなく共存するものなのである。

娘の名前を「紅葉」とした。地球温暖化現象で四季を感じられなくなってきた昨今、特に春と秋の季節感が希薄になってきている。子供には日本の四季の美を知っていて欲しいし誇りに思ってもらいたい。娘が大きくなっても自然と人間が気持ちよく成長できる環境、福岡であってほしい。

「子供にとって大事なのは記憶に残りうる近所の遊び場」だと大坪氏は言う。子供にとっての景観は視覚に限らない。5感による経験が子供の感性を形作り、次の時代の景観を規定する。身近な環境にこそ意識を向けたいものである。

（選考委員 三浦佳世）